『傷寒論』のもう一つの名著！

中国傷寒論解説

［続篇◎基礎と方剤］

勝田正泰監訳

生島忍＋勝田正泰＋吉田美保＋林　敏　訳

Ａ５判　並製　約 304 頁　定価 3,800 円（〒 310 円）

原著：『傷寒論十四講』（天津科技出版社）を翻訳・改編する。

劉渡舟教授著

日本の漢方家にも馴染みの深い劉渡舟教授

◇わが国で，10 年来，多くの漢方専門家に愛読され，深い感動を与えてきた名著『中国傷寒論解説』の続篇。

◇本書は，北京中医学院大学院での著者の講義をまとめたものであるが，劉教授にとっても相当の自信作。正篇をさらに発展させ，『傷寒論』をさらに興味深くした感動的な名著。

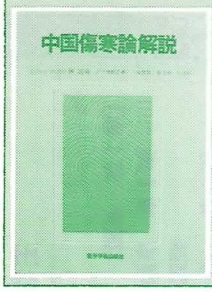
◇続篇では，『傷寒論』の基礎をさらに深め，気化学説を新たに加えるとともに，８つの基本方剤を中心とした方剤解説に力点をおいている。傷寒論の基本方剤をしっかり把握すれば，その変方である他のほとんどの方剤も理解しやすくなる。本書によって，傷寒方の組立とその深い意味あいがより深く理解できる。

［基本方剤］

桂枝湯・麻黄湯・小柴胡湯・承気湯
白虎湯・理中湯・四逆湯・苓桂湯

◇各項目ごとに，症例と方剤の図解説明が数多く付され，読みやすい構成になっている。

◇本書の序文は，日本の漢方家への劉渡舟教授のメッセージ。



姉妹篇

『中国傷寒論解説』

劉渡舟教授著　勝田正泰ほか訳

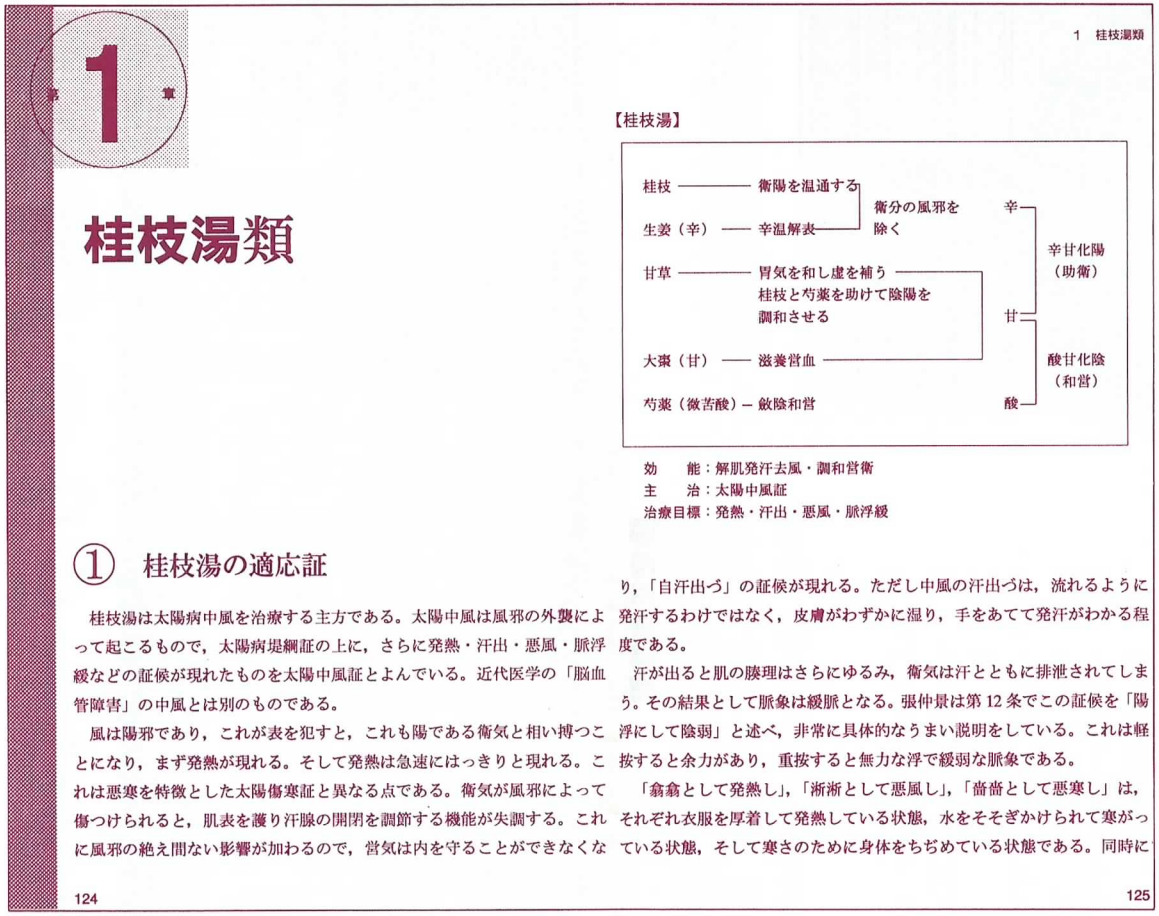
Ａ５判　上製　260 頁　3,600 円

1992 年 12 月 25 日まで
当社へ直接ご注文された場合，
送料は当社が負担します

〒 272　千葉県市川市宮久保 3-1-5

東洋学術出版社

電話（0473）71-8337
FAX　（0473）72-7060



第1章

桂枝湯類

【桂枝湯】

桂枝 ―― 衛陽を温通する
生姜（辛） ―― 辛温解表
衛分の風邪を除く
甘草 ―― 胃気を和し虚を補う
桂枝と芍薬を助けて陰陽を調和させる
大棗（甘） ―― 滋養営血
芍薬（微苦酸）― 斂陰和営
辛甘化陽（助衛）
酸甘化陰（和営）

効　　能：解肌発汗去風・調和営衛
主　　治：太陽中風証
治療目標：発熱・汗出・悪風・脈浮緩

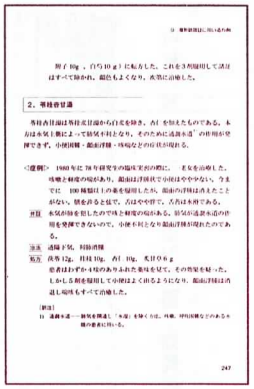
① 桂枝湯の適応証

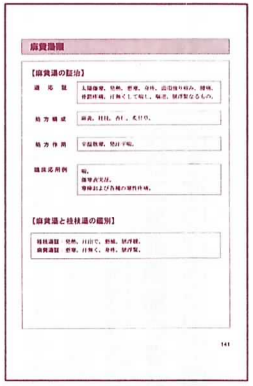
桂枝湯は太陽病中風を治療する主方である。太陽中風は風邪の外襲によって起こるもので，太陽病提綱証の上に，さらに発熱・汗出・悪風・脈浮緩などの証候が現れたものを太陽中風証とよんでいる。近代医学の「脳血管障害」の中風とは別のものである。

風は陽邪であり，これが表を犯すと，これも陽である衛気と相い搏つことになり，まず発熱が現れる。そして発熱は急速にはっきりと現れる。これは悪寒を特徴とした太陽傷寒証と異なる点である。衛気が風邪によって傷つけられると，肌表を護り汗腺の開閉を調節する機能が失調する。これに風邪の絶え間ない影響が加わるので，営気は内を守ることができなくなり，「自汗出づ」の証候が現れる。ただし中風の汗出づは，流れるように発汗するわけではなく，皮膚がわずかに湿り，手をあてて発汗がわかる程度である。

汗が出ると肌の腠理はさらにゆるみ，衛気は汗とともに排泄されてしまう。その結果として脈象は緩脈となる。張仲景は第12条でこの証候を「陽浮にして陰弱」と述べ，非常に具体的なうまい説明をしている。これは軽按すると余力があり，重按すると無力な浮で緩弱な脈象である。

「翕翕として発熱し」，「淅淅として悪風し」，「嚏嚏として悪寒し」は，それぞれ衣服を厚着して発熱している状態，水をそそぎかけられて寒がっている状態，そして寒さのために身体をちぢめている状態である。同時に





主な目次

［第1部・基礎］
第1章　序論――『傷寒論』の歴史的変遷と版本の伝来。
第2章　六経病の提綱証の意義
第3章　六経について
第4章　八綱弁証と六経弁証との関係
第5章　『傷寒論』の治療法則と処方の特徴
第6章　『傷寒論』の条文排列の意義
第7章　『傷寒論』の気化学説
［第2部・方剤］
第1章　桂枝湯の加減と証治
第2章　麻黄湯の加減と証治
第3章　小柴胡湯の加減と証治
第4章　承気湯類の加減と証治
第5章　白虎湯の加減と証治
第6章　理中湯の加減と証治
第7章　四逆湯の加減と証治
第8章　苓桂剤の加減と証治
第9章　寒熱錯雑に対する処方の証治
第10章　経方を用いる鍵は主証の把握にある

「緯」のタイプの『傷寒論』解説

一般に『傷寒論』の解説書・研究書は大きく「経」と「緯」の二種類に分けられる。「経」は条文の排列に従って考察するもの。「緯」は、『傷寒論』に提起されるいくつかの理論を中心に据え、関連する条文を選び出して、考察するものである。前著の『中国傷寒論解説』は「経」のタイプであり、今回の『続篇』は「緯」のタイプの傷寒論解説書である。経緯の両方向から研究すれば、『傷寒論』はより深く理解されよう。

第I部の七つの章では、『傷寒論』全体に共通するいくつかの問題について述べられている。その中でも、「八綱弁証と六経弁証との関係」、「『傷寒論』の条文排列の意義」、「『傷寒論』の気化学説」は従来の傷寒論解説書ではほとんど取り挙げられることがなかった名題であり、本書の価値を際立たせている。

後半の第II部では、代表的な「類方」について詳述されている。なかでも、白虎湯類、承気湯類、柴胡湯類などは、『傷寒論』の方剤のみの分析にとどまらず、『金匱要略』の方剤、さらに近現代の有効処方にまで言及されている。この点も本書の大きな特徴である。

私の印象では、『続篇』は劉教授の相当な自信作である。というのも、私が北京中医学院に留学して、二年目に大学院の講義を受ける機会をもったとき、先生は、この『続篇』の一部をもとに数回講義された。そして、本書は『傷寒論』の重要項目について解説したものであるから、くり返してよく読むように言われていたと記憶している。

（「訳者あとがき」より　生島　忍）